

〈なまめく・なまめかし〉の意味

小島 俊 夫

一 目標・方法・資料

後期古代語〈なまめく・なまめかし〉には、その意味を官能美とする少数者の見解と精神美とする多数者の見解とが対立している。しかも、対立する二つの見解は、いずれも、自説の是なる点のみを主張し、対者の説の非なる点に触れていない。本稿の目標は、〈なまめく・なまめかし〉の意味を官能美とする見解に賛意を表明し、かつその是なる点とこれに対立する見解の非なる点を究明することにある。

考察を進める方法を述べるにさき立つて、言語の性格の一側面について確認する必要がある。言語は、特定の時代の人々一人一人に用いられることによって、始めて言語と認められる。それと同時に、言語は、用いる人々一人一人の好悪・利害・その他による恣意性を超える言語共同体からの制約によって、始めて言語と認められる。言語の性格のこの側面が確認されることによって、たとえば、紫式部の作家としての成長や源氏物語の作品としての深化が〈なまめく・なまめかし〉の意味を深め

てゆくなどという見解は排除される。作家は作品を創作するのであって、単語（その意味）や文法を創作するのではない。

単語の意味を考察する場合に、「二階にあがる・山にのぼる」を対比して、「あがる・のぼる」の差異の側面を見るのは、妥当である。だが、「ひかえめで素敵だ・やさしくて素敵だ」を対比して、「素敵だ」の意味を「溫和だ」と考えたとしたら妥当でない。なぜなら、「粟として素敵だ」という可能性があるからである。ゆえに、〈なまめく・なまめかし〉の意味を考察する方法として、一つの〈文〉のなかで、どのような単語（たとえば〈あてなり〉）と関連して〈文〉を構成する現象が多数見られるかに着目する方法は、常に成功するとは限らない。

言語表現は、言語表現の〈場〉に基づいて構成される。言語表現の〈場〉は、話し手と話し相手との関係、言語表現に登場する人・事・物と人・事・物との諸関係、言語表現に構成される人・事・物と話し手・話し相手との諸関係に基づいて構成される。このため、採録される用例は、言語表現の〈場〉を構成する話し手・話し相手・人・事・物の各要素がじゅうぶんに充たされるよう、配慮されなければならない。見解が互いに交わら

ない平行の關係から脱して、その基本的な意味に近づくためには、配慮はとりわけ重要である。

（なまめく・なまめかし）をめぐる既発表の諸説のうち、本稿の筆者の読み得た論考は、一括して本稿の末尾に掲げられ、それぞれの論考の趣意が、（不本意ながら）執筆者名の記されることなく本稿に引用される。その理由は、いちいち氏名を記すと、同巧近似の論が繰り返され、それらをいちいち批判する結果、却って、本稿における筆者の主張せんとする論点の埋没する虞れがあるからである。

本稿の資料は、左のとおりである。

古今和歌集 日本古典文学大系 8 岩波書店

伊勢物語 伊勢物語精講 池田亀鑑 学燈社

枕冊子 日本古典全書 朝日新聞社

源氏物語 日本古典文学大系 14・15・16・17 岩波書店

和泉式部日記 同 20

紫式部日記 同 19

栄花物語 同 76

今昔物語集 同 25・26

二 精神美とする見解

（なまめく・なまめかし）の意味を精神美とする見解の代表的・指導的なものは、次のように、要約される。

（なまめく・なまめかし）は、当代好尚美中の最高峰を不す美であり、教養に徹した人格の匂いであり、心身一如

の風格美、肉体的感覺的なものを排除する精神的な美である。

本稿の筆者は、右の見解を是認することができない。以下、個々の点について示す用例に拠って、それらの根拠を明らかにしたい。

「教養に徹した人格の匂いであり、心身一如の風格美」と位置づけられた（なまめく・なまめかし）に、必ずしも教養の匂いでもなく、風格美でもないと考えられる用例群が見いだされる。

なまめかしきもの ほそやかに清げなる君達の直衣姿。をかしげなる童女のうへの袴などわざとはあらでほころびがちな汗衫ばかり着て、卯槌・薬玉など長くつけて、勾欄のもとなどに扇さしかくしてゐたる。「略一いとをかしげなる猫の赤き首綱に白き札つきて、いかりの緒、組みの長さなどつけて引きありくもかしうなまめきたり。五月の節のあやめの藏人、菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを、領布・裙帯などして、薬玉、皇子たち上達部の立ちなみたまへるにたてまつれる、いみじうなまめかし。（枕・なまめかしきもの）

をかしげなる童への姿なまめかしく、（源氏・初音）

河原のおと×の例をまねびて、童隨身を賜ひける、いとをかしげに装束き、みづらゆひて、紫襦濃の元結なまめかしう、たけ・姿と、のひ、美しげにて、十人、さまことにいまめかしうみゆ。（源氏・落標）

中、御社近う成程、参人返人様、行違、艶装

ウツル女会ウツルメノカケ。濃ノ打ウツ上ノ着キ、紅梅萌黄ベニウメモウキ重オモ着キ、生ナマカシシ歩ホ。
ワリ。〔今昔・卷第二十八第一〕

「あやめの藏人」とは、女藏人であつて、内侍・命婦などよりも下藩の女房（田中重太郎氏頭注）であり、童女・猫（以上、枕草子）、童べ・童隨身（以上、源氏物語）いづれも教養や風格に無縁な存在である。今昔物語集の「艶ズ装ゾキタル女」は、庶民である。

これらの用例をへなまめく・なまめかし」の異種異例と見なすことは、できない。むしろ、へなまめく・なまめかし」の意味を「教養に徹した人格の匂いであり、心身一如の風格美」でないと考えることが適切であろう。

「当代好尚美中の最高峰を示す美」と位置づけられたへなまめく・なまめかし」に、必ずしも最高峰の美を示していないと認められる用例群が見いだされる。

かゝる御あたりに、明石は、けおさるべきを、いと、さし
もあらず、もてなしなど、気色はみ恥づかし、心の底ゆ
かしきさまして、そこはかとなく、あてになまめかしく見
ゆ。（源氏・若菜下）

「けおさるべき」明石の上には、「なまめかしく見ゆ」とあり、最高の紫の上には、

紫の上は、葡萄紫ぶどうむらさきにやあらむ、色濃いろのちかき小桂こけい、薄蘇芳うすそうぼうの細長ほそながに、御髪みかみのたまれるほど、こちたくゆるゝかに、大きおほさな
どよきほどに、やうだいあらまほしく、あたりに、匂におひ満み
ちたる心ちして、花はなといはゞ、桜さくらにたとへても。なほ、も
のよりすぐれたるけはひ、殊ことごとに物し給ふ。（同）

とあるように、「匂ひ満ちたる心地」といい、へなまめく・なまめかし」が用いられない。

冬の御かたにも、「時／＼によれる匂ひにおひの、さだまれるに、けたれんは、あいなし」とおぼして、薰衣香かぐらなの、法はふのすぐれたるは、前の朱雀院すざくねんのをうつさせ給ひて、公忠こうちゆうの朝臣あその、ことに選えらびつかうまつれりし、百歩ひやくほの方かたなど、思おもひえて、世よに似にずなまめかしきを、とり集あつめたる、「心掇こころあて、すぐれたり」と、いづれをも、無徳むとくならず定め給ふ。（源氏・梅枝）

「けたれんは、あいなし」と「冬の御かた」（明石の上）の調合した「香」は、「世に似ずなまめかしき」ものと評価され、他方、「これにまさる匂ひあらじ」と絶賛された「対のうへ」（紫の上）の調合した「香」は、

対のうへの御は、三種さんしゆある中に、梅花ばいけは、はなやかに、今いまめかしう、すこしはやき心しらしを添そへて、めづらしき薰かぐらり加かはれり。「この頃の風にたぐへんには、さらに、これにまさる匂ひあらじ」と、めで給ふに、（同）

とあるように、へなまめく・なまめかし」が用いられていない。「匂ひ・匂ひやかなり」の方がへなまめく・なまめかし」よりも（すくなくとも源氏物語において）評価が高いかと考えられることは、

兵部卿へいぶけいの宮は、いとあてに、なまめい給へれど、匂におひやかになどもあらぬを、（源氏・若紫）
匂におひやかなる方はおかれて、たゞ、いとあてやかに、をかしく、（源氏・若菜下）

おりざまなまめきたれど、匂ひやかならぬに、(源氏・玉鬘)

などの用例から、明らかである。

「肉体的感覺的なものを排除する精神的な美」と位置づけられた「なまめく・なまめかし」が必ずしも肉体的感覺的な要素を排除しないと考えられる用例群が見いだされる。

東の渡殿の下よりいづる水の心はへ、つくろはせ給ふとて、いと、なまめかしき往姿。うちとけ給へるを、「いと、めでたう、嬉し」と見たてまつるに、閑伽の具などのあるを、見給ふに、おぼし出で、「尼君は、こなたにか。いと、しどけなき姿なりけりや」とて、御直衣召し出で、たてまつる。(源氏・松風)

いはむかたなき盛りの御かたちなり。いたう、そびやぎ給へりしが、すこし、なりあふ程になり給ひにけり。「御姿など、かくてこそ、ものく、しかりけれ」と、御指貫のすそまで、なまめかしう、愛敬のこぼれ出(つ)るぞ、あながちなる見なしなるべき。(同)

萩・紫苑、いろくの衣に、濃きがうちめ心ことなるを上にきて、顔はひきいれて、覗の簞に枕してふし給へる額つき、いとらうたげになまめかし。(紫式部日記・寛弘五年八月)

「しどけなき姿」・「御指貫のすそ」・「ふし給へる額つき」がそれぞれ「なまめかし」にかかわるといふ事實は、「なまめく・なまめかし」が肉体的感覺的な要素を排除しないことを裏づけると考えられる。「なまめく・なまめかし」が肉体的感覺的な

要素を排除しないという事實は、「なまめく・なまめかし」の意味を官能美とする見解を是とすることにつながるであろう。

これらを要するに、「なまめく・なまめかし」の意味は、教養に徹した人格の匂いでもなく、心身一如の風格美でもなく、当代好尚美中の最高峰を示す美でもなく、肉体的感覺的な要素を排除する精神美でもないと認められる。

以上のほか、「なまめく・なまめかし」の意味について、「しめやかさを含んだなよやかさ」・「昇華された沈潜美、あえかなるたそがれの美」・「重圧感の無い、仰々しく儀式張らぬ簡淨さを持った、私的で控えめに内輪な点」・「心しらいにおいても、表現においても、実現された美しさにおいても、十分の心づかいがされているが、しかも未熟(なまめく)のように見えるさりげなさ」などの見解がある。これらの見解は、「なまめく・なまめかし」の意味を精神美と考える点で共通し、その志向は、むしろ論者それぞれの人生観を反映しているのではなからうか。「なまめく・なまめかし」は、枕草子「なまめかしきもの」の段や今昔物語集巻第二十八第一などの用例に見たように、「昇華された沈潜美」・「私的で控えめ」・「十分な心づかいとさりげなさ」などとは無縁な人々についても用いられる。言語は、言語共同体の全員のなかに、その基本的機能を確保する。源氏物語における「なまめく」と「なまめかし」の意味について、そこに相違があるとする視点から、次のような見解が見られる。

光源氏対象の「なまめく」はすべて光源氏の若い時のさまである。どちらかといえば他の人を意識してとりつく

ろつた用法で、自然に滲み出る優雅な美しさとはまでは言えないと思う。光源氏対象の「なまめかし」は、光源氏の自然に滲み出た美しさであつて、他人を意識してとりつくるつたさまではない。洗練され、深みのあるうっとりとする美しさである。そして光源氏の成長とともに、この「なまめかし」美は深化され落ち着いた美にまで高められてくる。光源氏晩年の「なまめかし」は若い時のもてつけたたおやかな美そのものを表わした「なまめく」とは異なり、教養・人格により支えられたみずみずしい姿態・振る舞いを表わしている。

〈なまめく〉の意味は、光源氏の若いころの、他人を意識してとりつくるつたさまであり、〈なまめかし〉の意味は、光源氏の晩年の、教養・人格によつて支えられた姿態・振る舞いであるというのがこの見解の骨子である。

〈さわぐ・さわがし〉・〈なげく・なげかし〉などが、それぞれ、動詞と形容詞の文法的機能を別にして、単語の基本的意味を共有しているのと同様に、〈なまめく〉と〈なまめかし〉も、動詞と形容詞の文法的機能を別にして、単語の基本的意味を共有していると考えられる。次に掲げる一対の用例は、

おやとも思はず、わかく清げに、なまめきて、いみじき、
御かたちのさかりなり。(源氏・野分)

いと若く、清らにて、かく、御賀などいふことは、「ひが数へにや」とおぼゆるさまの、なまめかしく、人の親げなくおはしますを、(源氏・若菜上)

のように、同一人物について、「おやとも思はず」・「人の親げ

なく」・「わかく清げに」・「若く、清らにて」などと近似の言い方を用いて、近似のことがらを述べる言語表現である。この二つの〈文〉(と〈文〉の断片)のなかで、一方に〈なまめく〉が、他方に〈なまめかし〉が用いられていることは、この点を裏づけているものと考えられる。

この内侍、常よりも清げに、やうだい・頭つき、なまめきて、(源氏・紅葉賀)

いとゞ、むかし思ひいでつゝ、ふりがたくなまめかしき様にもてなして、(源氏・朝顔)も、同巧近似の類例である。

まして、若いころの光源氏云々、晩年の光源氏云々と単語の意味との関連づけは、たとえ文芸研究の視点に立つ場合であっても、慎重な用心が求められよう。〈なまめかし〉の意味に深化・洗練が有るのではなく、この単語の用いられている作品自体に深化・洗練があるのである。なぜなら、作家は、作品を創作するのであつて、単語(その意味)や文法を創作するのではないからである。

三 官能美とする見解

〈なまめく・なまめかし〉の意味を官能美とする見解の骨子は、次のとおりである。

平安時代の用語の中で、「うるはし」という端麗美、「らうたし」という可憐美のそれらに對して、「なまめかし」というのは、滑柔性に富んだおのずからなる媚態の印象に

与えられている、つまり魅力を感じさせる性的美を意味する語と大体見てよいであろう。みずみずしい性的な若さの美、その保持され、むしろ横溢している姿態が即ち「なまめかし」であり、それをおのずから発散させる態度及び言動が即ち「なまめく」であると説明され得ると思うのであるが、その姿態なり言動なりは、先人的な侮蔑感と結びつけられているのでは決してない。

この見解を端的に裏づけるものとして、代表的・指導的な提唱者は、伊勢物語第一段の

むかし、男、初冠して、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。おもほえず、古里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男のきたりける狩衣の裾をきりて、歌をかきてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむきたりける。

春日野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎり
しられず

となむ、おいつきていひやりける。ついで面白きことともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもじずり誰ゆゑにみだれそめにしわ
れならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

を引用して、

ただ、容姿の佳いという一通りの印象だけでなく、必ず

それ以上のものであることは、それをかいま見た男の「心地惑ひにけり」とあるのでも推知される。「忍ぶの乱れ限り知られ」ぬほどに、初冠直後の青春の異性を牽きつけず措かなかつた若い女の柔かくて強い魅力が十分に想像できる。何としてもそこに性的な或る感じの含まれているのを認めることなしには、解釈できない一文である。

と、述べている。しかるに、へなまめく・なまめかしの意味を精神美とする見解に立つ論者の第一人者は、この伊勢物語第一段など六例を示して、「なまめく」は、へみやび・みやびかなり」と同義であつて、和歌の贈答行為をさして云つたものと解されるのである」と述べている。

へなまめく・なまめかしの意味について、一方は「性的な或る感じの含まれているのが認められる」とし、他方は「へみやび・みやびかなり」と同義」とする。両見解は、あい交わらない平行の関係にある。平行の関係は、次の用例にも、それぞれ見いだされる。

ありながら歸したてまつらんもなさけなかるべし、ものばかり聞えんと思(ひ)て、西のつま戸に円座さし出で、入れたてまつるに、世の人の言へばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。(和泉式部日記・長保五年四月)せんざいのをかしきなかに歩かせ給(ひ)て、「人は草葉の露なれや」などの給(ふ)。いとなまめかし。(同・五月)へなまめかし」の意味が、それぞれ、或る論者によつては、

「和泉式部の人からから、官能美と解される」とされ、別の論者によつては、「教道親王の人からから、精神美と認められる」

とされるであろう。

へなまめく・なまめかし」の意味についての見解があい交わらない平行の關係から脱して、その基本的意味に近づくためには、用例として採録するに当たって、言語表現の「場」を構成する話し手・話し相手・人・事・物の各要素がじゅうぶんに充たされるように、配慮されなければならない。本稿の筆者は、へなまめく・なまめかし」の意味を官能美とする見解を支持すべく、しかも既発表の論文とは異なる方法に拠つて、論証を展開する。

若き人二三人あるは、世に愛でられ給ふ御有様を、ゆかしき物に思ひ聞えて、心げさうしあへり。よろしき御衣たてまつりかへ、つくろひ聞ゆれば、正身は、何の心げさうもなくしておはす。をとこは、いとつきせぬ御さまを、うち忍び、用意し給へる御けはひ、いみじうなまめきて、「見知らむ人にこそ見せめ。何のはえあるまじきわたりを。あなたとほし」と、命婦は思へど、(源氏・末摘花)

右の用例では、「をとこ」に対し、「若き人」(侍女)は、いずれも「心げさう」し、「命婦」は、「見知らむ人にこそ見せめ」と思う。「をとこ」の魅惑的な官能美が「御けはひ、いみじうなまめきて」と描写されているものと考えられる。ゆえに、へなまめく・なまめかし」の意味は、人を魅惑する官能美と認められる蓋然性を有する。

お前かき梅の、いといたく、ほころびこぼれたる匂の、さと、うち散りわたれるに、例の、中將の御薫りの、いとゞしく、もてはやされて、いひ知らずなまめかしう、は

つかにのぞく女房なども、「鬨は、あやなく、心もとなき程なれど」「香にこそ、げに、似たる物なかりけれ」と、めであへり。おとゞも、「いとめでたし」と見給ふ。(源氏・匂宮)

例の、物めでする若人たちは、「なほ」「殊なりけり」などいふ。「この殿のひめ君の御かたはらには」「これをこそ、さし並べて見め」と、聞きにく、いふ。げに、いと若う、なまめかしきさまして、うち振舞ひ給へる匂など、世の常ならず。(源氏・竹河)

またの日、日さし出でて巳の時ばかり、きのふの上達部參らせ給ふ。きのふは醒はしき御よそひなりにしに、けふは殿ばら君逢みな直衣にて参り給へり。きのふよりはけふの御有様、いみじくなまめかしくをかしきに、御香どものしみかへり給へる程も、物めでせん人は消え入りぬべし。(栄花・巻第十七・音楽)

右の用例における「はつかにのぞく女房」・「物めでする若人たち」・「物めでせん人」は、「中將」・「これ」・「殿ばら君達」に対し、異性として強く魅かれるものを感じており、その情景は、「めであへり」・「聞きにく、いふ」・「消え入りぬべし」と描写されている。ゆえに、へなまめく・なまめかし」の意味は、人を魅する官能美と認められる蓋然性を有する。

いと、なまめかしき柱姿、うちとけ給へるを、「いと、めでたう、嬉し」と見たてまつるに、(源氏・松風)
御指貫のすそまで、なまめかしう、愛敬のこぼれ出(つ)るぞ、あながちなる見なしなるべき。(同)

顔はひきいれて、硯の簪に枕してふし給へる額つき、いとらうたげになまめかし。(紫式部日記・寛弘五年八月)

肉体的感覺の要素としての「うちとけ給へる」桂姿・「御指貫のすそ」・「ふし給へる額つき」が「なまめかし」にかかわるということ、へなまめく・なまめかしの意味が人を魅する官能美と認められる蓋然性を有することになるであろう。

単に魅力的というよりも、さらに一步ふみ込んで、妖艶な性的官能美を反映していると認めるべきへなまめく・なまめかし」の用例が、左のように、見いだされる。

この内侍、常よりも清げに、やうだい・頭つき、なまめきて、装束・有様、いと花やかに、このましげに見ゆるを、

「さも、旧りがたうも」と、心つきなく見給ふ物から、「いかゞ思ふらん」と、さすがに過ぐしがたくて、裳の裾をひき、驚かし給へれば、かはほりの、えならず絵かきたるを、さし隠して、見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮いたく黒み落ちいりて、いみじく、はづれそ、けたり。(源氏・紅葉賀)

寄り居給へる御けはひに、いとゞ、むかし思ひいでつゝ、ふりがたくなまめかしき様にもてなして、いたうすげみにたる口つき思ひやらるゝ声づかひの、さすがに、舌つきにて、「うちざれん」とは、なほ思へり。「いひこし程に」なときこえかゝるまばゆきよ。(源氏・朝顔)

「内侍」は、いかにも好色に(「このましげに」)見受けられ、また、異性に流し目を送り、たわむれ、言い寄る。このような言語表現の「場」における「なまめきて」・「なまめかしきさま

に」は、魅力的というよりも、一步ふみ込んで、妖艶な性的官能美を反映していると認められる蓋然性を有する。

これまで示してきた用例群は、言語表現の「場」を構成する人・事・物のなかの人にかかわるへなまめく・なまめかし」であつた。では、事・物にかかわるそれは、どのような性格であろうか。

「故母御息所の御兄の律師の、こもり給へる坊にて、法文など読み、行ひせむ」と、おぼして、二三日、おはするに、あはれなる事、多かり。紅葉、やう／＼色づきわたたりて、秋の野の、いと、なまめきたるなど、見給ひて、故郷も忘れぬべく、思さる。(源氏・賢木)

いと、さしも聞えぬものゝ音だに、折からこそは、まさる物なるを、はる／＼と、物のとゞこほりなき海面なるに、中／＼、春・秋、花・紅葉のさかりなるよりも、たゞ、そこはかとなう繁れる蔭ども、なまめかしきに、水鶏のうちたゝきたるは、「誰が門さして」と、あはれにおぼゆ。(源氏・明石)

右の二例は、自然「秋の野」・「そこはかとなう繁れる蔭ども」を対象とする。自然の美の契機は、「紅葉のやう／＼色づきわたり」・「水鶏のうちたゝきたる」ことであつて、ともに「あはれなる事多かり」・「あはれにおぼゆ」とある。かかる言語表現の「場」におけるへなまめく・なまめかし」の意味は、後期古代日本人の官能を魅惑してやまぬ自然美であると認められる蓋然性を有する。

秋の野になまめきたてるをみなへし あなかしがまし 花

もひと時（古今・卷第十九・雜體・一〇一六）

この歌について、

あきくればのべにたはるゝ女郎花 いづれの人かつまでみるべき（同・一〇一七）

名にめでてをれるばかりぞ をみなへし 我おちにきと人にかたるな（同・卷第四・秋歌上・二二六）
をみなへしおほかるのべにやどりせば あやなくあだの名をやたちなむ（同・二二九）

などの歌を参照して考えると、その擬人的表現を考量してもなお、「なまめきたてるをみなへし」の「なまめく」の意味は、後期古代日本人の官能を魅惑してやまぬ自然美であると認められる蓋然性を有する。

暗うなりたる程なれど、鈍色の御簾に、黒き御几帳の透影あはれに、追風なまめかしく吹（き）とほし、けはひあらまほし。（源氏・朝顔）

さま変れる御住ひに、御簾の端 御几帳も青鈍にて、ひまくより、ほの見えたる薄鈍、くちなしの袖口など、中く、なまめかしう、奥ゆかしう、思ひやられ給ふ。（源氏・賢木）

「なまめく・なまめかし」の意味は、後期古代日本人の官能を魅惑してやまぬ自然美のみならず、日常身辺の事がらの美にまで及ぶ。

四 結 論

後期古代日本語「なまめく・なまめかし」の意味について、言語表現の「場」（話し手・話し相手・人・事・物相互の諸関係）を重視する方法により、次の結論を得た。

(一) 「なまめく・なまめかし」が教養・風格に無縁の人物・事物の描写に用いられ、好尚美中の最高を示す人物の描写に必ずしも用いられず、むしろ同席する副次的人物の描写に用いられている。ゆえに、「なまめく・なまめかし」の意味には、風格美・精神美と認めるべき蓋然性は無い。「なまめく」の意味と「なまめかし」の意味を別種と見る説は、用例群を突き合わせて考察することにより、否定される。また、「なまめかし」の意味が作家の芸術的成長や作品の深化により、深化・洗練されたとする説は、肯定し得ない。なぜなら、作家は作品を創作するのであって、単語（その意味）や文法を創作しないからである。

(二) 或る一つの言語表現の「場」において、或る登場人物が他の登場人物に官能的魅力を感じしめていと認められる場合に、その人物が「なまめく・なまめかし」と描写され、時には、性的官能をもって人が人に近づく場合にも、この単語が用いられる。ゆえに、「なまめく・なまめかし」の意味は、人を魅する官能美と認められる蓋然性を有する。自然界の美、日常身辺の美においても、この単語が官能美として用いられると考えられる。

（語彙体系の一環としての「なまめく・なまめかし」を捉え

ることは、後考に俟つ。

関みさを 美の様式『源氏物語の精神史的研究』白水社・一九四一

吉沢義則 平安時代に発見された「なまめかし」の性格『歌と書』京都印書・一九四五

平安時代に於ける、なまめかし・みやび・えん・すき・風流

『源氏物語今かがみ』新日本図書・一九四六

なまめく・なまめかし『源語釈家』誠和書院・一九五〇

森岡常夫 源氏物語の人間美——なまめかしを中心として——

『国文学解釈と鑑賞』・一九四七

島津久基 なまめかし附なまめく『国文学ノート』河出書房・一九四七

岡崎義恵 源氏物語における美の諸相「季刊望郷」・一九四九

大塚 旦 なまめかし考『芸林』・一九五二

再び「なまめかし」について『平安文学研究』・一九五七

北山谿太「なまめかし」『艶』考『国語と国文学』・一九五四

前田惟義「なまめかし」論——北山谿太氏の〈考〉批判——

『国語と国文学』・一九五七

大野 晋 なまめかし『日本語の年輪』有紀書房・一九六一

吉本浩士「なまめかし」考——源氏物語を中心に——『愛媛国文研究』・一九六二

大内美晴 源氏物語における「なまめかし」について『高知女子大国文』・一九六九

梅野きみ子 源氏物語の「なまめく」と「なまめかし」について

て『椋山学園大学研究論集』・一九七五

北村英子『なまめかし』おうふう社・一九七五

踏沢弥生 源氏物語における「なまめかし」の一考察——枕草子と比較して——『常葉国文』・一九七六

清水彰 源氏物語の「なまめかし」『らうたし』「あて」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』・一九九三

注 左の二例は、月光に映える「なまめかし」い光源氏、「なまめかし」い月光に映える光源氏として、近似の心象風景をもつ。

出で給ふほどを、人くのぞきて見たてまつる。入りがたの月いと明きに、いと々、なまめかしう、清らにて、物をおぼいたるさま、虎おほかみだに泣きぬべし。(源氏・須磨)

あはれ添へたる月かげの、なまめかしう、しめやかなるに、うちふるまひ給へるにほひ、似る物なくて、いと忍びやかに、いり給へば、(同)

これは作家・話し手が素材を形象化する方法上の問題による差異である。この差異を検討することによって、へなまめく・なまめかしの意味が、人に対する官能美にとどまらず、自然の美や日常身の事からの美から受ける官能美をも反映することが理解されるであろう。

(こじま としお)